

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

広げよう ミネラルの郷づくりの輪

受賞者 <sup>けんこう</sup>にしあいづ健康ミネラル <sup>やさいふきゅうかい</sup>野菜普及会  
(<sup>ふくしまけんやまぐんにしあいづまち</sup>福島県耶麻郡西会津町)

## ■ 地域の沿革と概要

西会津町は、福島県の北西部耶麻郡にあり、町のほぼ中央を阿賀川<sup>あががわ</sup>が東から西に横断し、海拔150m～200mの平坦地が河川に沿って盆地状に広がっている。気候は日本海型に属し、夏季は高温多湿であるが朝晩は涼しく、冬季の平均降雪期間は128日、平均最深積雪量は142cmで特別豪雪地帯の指定を受けている。

町の面積は298.13km<sup>2</sup>であり、その約86%を山林が占めている。販売農家数647戸のうち、191戸が専業農家であり、水稻を中心にきゅうり、トマト、アスパラガス、シイタケ等が栽培されている。

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

西会津町では少子・高齢化が顕著に進み、町の基幹産業である農業の分野では農業就業人口928人のうち65歳以上が75%を占め、高齢化が進んでいる。農業産出額も昭和60年は約20億円であったが、平成18年には13.6億円と減少している。

### 2. むらづくりの基本的特徴

#### (1) むらづくりの動機、背景

##### ア ミネラル栽培を推進するに至った動機、背景

西会津町は、昭和60年当時、脳血管疾患の死亡率が全国平均の1.76倍と高く、「短命の町」と呼ばれていた。町では「百歳への挑戦」をテーマに掲げ、平成5年4月1日に「健康の町」を宣言し、「保健・医療・福祉」の連携を強化した「トータルケアのまちづくり」を進め、町民の健康に対する意識向上を図ってきた。

平成9年に、西会津町で開催された「第2回ふるさといきいき村づく

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	新市町村単位の集団等
地区の性格	機能的な集団等
農家率 (内訳)	38.6%
	総世帯数 2,653戸
	総農家数 1,023戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 191戸
	1種兼業農家 70戸
	2種兼業農家 386戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 29,813ha
	耕地面積 1,268ha
	田 926ha
	畑 342ha
	耕地率 4.3%
	農家一戸当たり耕地面積 1.2ha

※H22西会津町の数値

り全国サミット」での、中嶋常允<sup>なかしまとどむ</sup>氏（当時、農業科学研究所所長、理学博士）の基調講演「土と植物といのち」を契機に、町は平成10年から健康な土づくり\*事業を始めた。

※健康な土づくり

マンガン、鉄、銅、亜鉛、ホウ素のミネラル成分5要素を含む、19項目の土壌診断に基づいて施肥設計を行ったバランスの取れた土壌を作り、適切に栽培管理を行うことで、安全でおいしい野菜を生産するという考え方。

この健康な土づくりによる栽培を「ミネラル栽培」と呼び、ミネラル栽培により生産された野菜を「ミネラル野菜」と呼ぶ。

平成10年、町内の各自治区から110点の土壌を採取して分析を行った結果、チッソ、リン酸、カリが過剰でミネラル成分が極端に少ないことが判明したため、同年からミネラル栽培の本場である熊本県への農家研修を始め、中嶋常允氏の講演会と指導会の開催、土壌分析結果を基にした相談会の継続開催など、ミネラル栽培の普及拡大に取り組み、平成13年からは「健康な土づくり推進員」の育成講座を実施するなど、栽培技術の向上に積極的に取り組んでいる。

## イ 「にしあいづ健康ミネラル野菜普及会」の設立

平成10年、家庭菜園を作っていた5名の女性が、中嶋氏の講演に共鳴し、ミネラル栽培による野菜づくりに取り組んだ。女性たちは、ミネラル栽培により生産した野菜について「えぐみが無く、野菜本来のおいしさがあり、日持ちがする」など、今まで栽培していた野菜との違いを実感し、この栽培法の可能性を確信した。そして、平成12年8月、この5名を中心として家庭菜園に取り組む女性19名が集まり、「にしあいづ健康ミネラル野菜普及会」（以下「普及会」という。）を発足した。同月に、町の商業団地内で普及会が開催した「健康ミネラル野菜市」には、多くの町民が来場して好評を博した。このことから、普及会では、会員の健康増進や所得向上に加え、ミネラル野菜を町のブランドにしたいと考え、各種イベントに積極的に参加してPRと販売に取り組むこととなった。



写真1 普及会の皆さん

普及会は、住んでいる地区も年代も違う会員がミネラル栽培に大きな可能性を期待し、生産や販売などに対して徹底的に話し合い、困難を乗り越えて団結力を強めることで組織が強化されている。

## (2) むらづくりの推進体制

普及会では、業務を円滑に運営するため、町内5地区を3区分した中か

ら役員を選出している。役員の任期は2年であるが、再任は妨げないこととしている。

平成25年度には、22歳の専業農家の女性が会員となる、明るいニュースがあった。

平成26年度の会員は、新たに5名が加入して63名となっている。

#### ア 「にしあいづ施設園芸生産振興組合」

冬期間もミネラル野菜を生産出荷する、施設園芸の実践者。町独自のリース事業で設置したハウスは115棟に上り、栽培面積は315aでミネラル栽培ほ場全体の22%を占めている。JAやスーパーへの出荷が多く、組合員38名中24名が普及会員である。

#### イ 「にしあいづ産直野菜出荷組合」

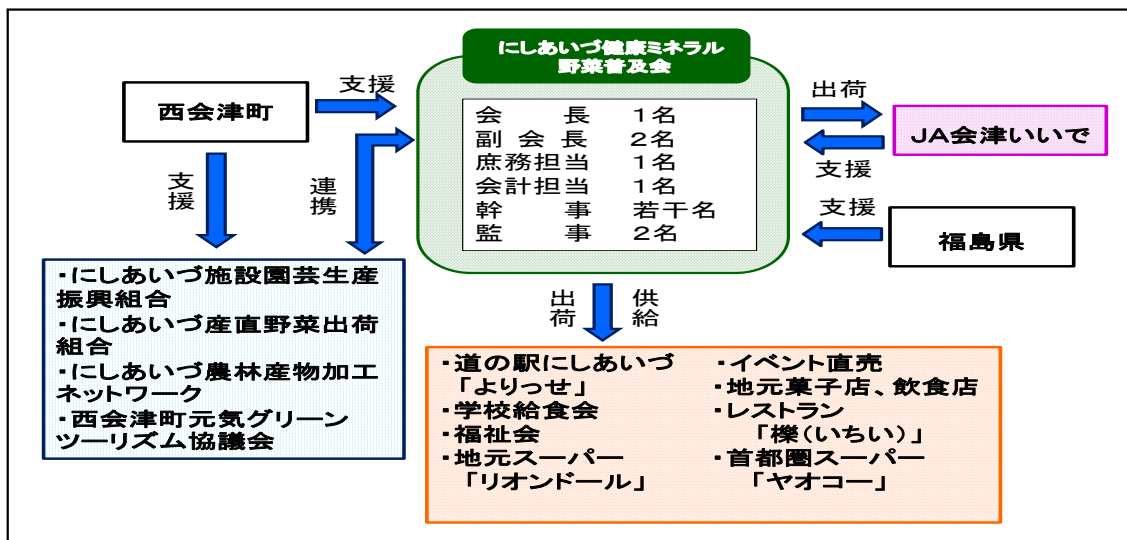
平成24年に、普及会員と施設園芸組合員のうち、産直野菜として首都圏のスーパー「ヤオコー」に出荷する農家19戸により設立された。18戸が普及会員である。

#### ウ 「にしあいづ農林産物加工ネットワーク」

3グループ21名中6名が普及会員となっており、6次化の分野で新たな商品開発等に取り組んでいる。

その他、西会津元気グリーンツーリズム協議会、道の駅、学校給食会、地元レストラン等との連携、自治体からの指導・支援を受けながら活動を行っている。

第2図 むらづくり推進体制図



### ■ むらづくりの特色と優秀性

#### 1. むらづくりの性格

普及会が、ミネラル野菜の普及活動に取り組むことによって、西会津町の農業に新たな展開をもたらし、付加価値のついた産品を生み出しただけでなく、町の施策目標「健康の町」を実践し、多くの町民に食による健康の大切

さを啓発している。普及会が原点となった活動の輪は多様に広がり、その主な特色・効果は次のとおりである。

- (1) ミネラル野菜を作る普及会員や、加工品づくりに取り組む町民の健康に対する意識の高まりによって、地域で生産される農林産物や食文化を見直し、守り、次の世代にも伝えるという気運の醸成につながっている。
- (2) 63名の組織に成長した普及会の活動は、町民やJA青年部、酒造関係者や流通関係者、飲食店関係者との交流など、町内だけでなく県外にまで広がり、後に続く人を育てる「ものづくり・ひとづくりの輪」につながっている。
- (3) 普及会が担うミネラル野菜の生産から加工・販売までの取組は、女性が主役であり、一次産業を中心とした女性の雇用の場の確保とそれらに関わってきた女性の元気パワーが町づくりの大きな力となり、地域の活性化に大きく寄与している。

## 2. 農業生産面における特徴

### (1) 土壌分析に基づく適正施肥の推進

ミネラル栽培ほ場では、ミネラル成分5要素を含む19項目の土壌分析に基づき、微量要素を含んだ肥料が適正に施肥されることによって、土壌が改善されている。

生産者の改良資材の購入実績により、町の栽培指導専門員が適正な土壌改良材を施用したかを確認し、ミネラル栽培ほ場として認定されれば町により看板が立てられる。



写真2 ミネラル栽培ほ場看板

土壌分析は、適正施肥の開始後3年間は毎年、それ以降は3年ごとに実施することとしている。分析費用10,500円については、1、2年目は町が全額補助し、3年目は町が半額補助しており、4年目からは生産者が全額を負担している。土壌分析に基づいて適正施肥が行われることにより、窒素過剰が誘因となった病害虫の発生が減少し、農薬散布の回数が減少するなど、ミネラル栽培の取組は環境にやさしい農業に貢献している。

### (2) ミネラル栽培の取組による経営の安定化

町の農業は、米が農業産出額の8割を占め、水稻中心の経営が営まれていたが、米価の下落や生産調整の強化、担い手不足と高齢化等により、農業産出額や農業所得は低迷を続け、遊休農地の活用も大きな課題となっていた。

家庭菜園レベルから始まったミネラル野菜栽培は、次第に消費者や市場

関係者から評価されるようになり、東京の市場でもこだわりの農産物として高値で取引されている。普及会員が遊休畑を借り上げてミネラル栽培を行うなど、遊休農地の解消に寄与しているほか、普及会員である4名の専業農家がミネラル野菜を農協やスーパーに出荷することにより、西会津町におけるミネラル野菜の総販売額が最近では一億円に近づきつつあり、専業農家の経営安定に貢献している。

### (3) 耐雪型パイプハウスによる冬期間の生産・販売

西会津町は、ミネラル野菜の生産拡大を目的に、県の補助金を活用した町独自の「耐雪型パイプハウスリース事業」を平成16年度に開始した。普及会員は、この事業を活用し、施設化による規模拡大と通年栽培の推進に積極的に取り組んでおり、冬期間の作物として寒締めホウレンソウや軟白ネギ等を栽培している。冬期間の野菜栽培が困難であった西会津町で通年栽培が可能となったことから、道の駅にしあいつ「交流物産館 よりっせ」（以下「よりっせ」という。）では年間を通して地元産の野菜が販売されている。



写真3 冬期間栽培

### (4) 認定農業者によるミネラル栽培の牽引

西会津町の認定農業者有志で構成される「西会津町認定農業者連絡会」の会員数は43名で、このうち16名が普及会員である。認定農業者の多くは、米や野菜のミネラル栽培に関して生産の拡大や研修生の受入れなど多様な取組を行い、ミネラル栽培を積極的に牽引している。

また、認定農業者43名のうち、家族経営協定を締結している農家は15戸であり、約半分が普及会員である。

家族経営協定は、家族で取り組む農業経営について、経営方針や一人ひとりの役割、休日や給料などの就業条件、就業環境について、家族みんな話し合いながら取り決め、お互いを尊重し、楽しい家庭づくりとやりがいのある農業経営を目指すものである。協定を結ぶことによって、女性が自由に使える時間とお金を持てるようになることから、協定は女性の社会参画のために重要な役割を果たしている。

## 3. 生活・環境整備面における特徴

### (1) 学校給食・福祉施設への食材の供給

平成14年、町内の小中学校にあった給食施設が「西会津町給食センター」に統合された。この統合を契機に、地産地消を推進することと体に良くおいしいミネラル野菜を児童・生徒に食べさせることを目的として、普及会の生産するミネラル野菜が給食の食材として使われることとなり、あわせ

て福祉施設の特別養護老人ホームなど3施設にも供給されることとなった。

普及会の連絡員と各施設の管理栄養士、町農林振興課の職員が毎月打合せを行い、その時期に生産されるミネラル野菜を使用した給食が提供できる献立を考えており、食材の提供は普及会の極めて重要な取組として位置付けられている。

また、普及会は毎年1月に給食センターへミネラル野菜を無償で提供し、会員と児童・生徒との合同給食会を実施している。合同給食会を通じた会員との交流は、児童・生徒にとって重要な食育の場となっている。



写真4 合同給食会

## (2) 小・中学生の農業体験支援

小・中学校の総合学習の時間に、会員が講師となってミネラル野菜の農作業体験を指導している。中学校で行った農作業体験が契機となり、ミネラル栽培に取り組む農業後継者が、平成25年度に普及会員となっている。

## (3) 若い農業者への支援

平成23年から、農業に関心をもつ若者2名が町に移住し、普及会員の家で研修している。指導する会員は、増えてきた遊休農地の活用も考え、土地利用型野菜の露地栽培でも農業経営が成り立つように、自らの技術や経験を積極的に伝えている。

また、町の高校を卒業した地域の若者も自宅とは別の農家で研修を行い、様々な野菜の栽培方法を学んでいるほか、県外からの研修希望者も現れ、普及会の活動が後継者の育成に大きく貢献している。

## (4) 直売活動が育む自信と意欲

平成14年に、普及会はプレハブの直売所「にしあいづ健康ミネラル野菜市」を国道49号線沿いにオープンし、会員が当番制でレジを担当しながら、ミネラル栽培の良さについて消費者に説明し、理解者を増やしてきた。

平成16年には、「道の駅にしあいづ」がオープンして施設内に「よりっせ」が開設されたことを契機に、普及会は商標登録した「百歳への挑戦ミネラルっ娘」と印刷した袋に入れたミネラル野菜を、目玉商品として販売している。直売所は、自分たちの農産物を知ってもらう大切な売り場であり、会員の自信と意欲を育む大切な場となっている。



写真5 交流物産館 よりっせ

また、交流のある県内外の市区町村で開催される各種イベントには、普及会員が積極的に出向き、ミネラル野菜のPRと販売を行っている。

#### (5) 広がるミネラル野菜利用の輪

平成16年8月、西会津町が主催する女性起業家育成講座の受講者で組織された「西会津の郷土食を創る会」の会員が、「よりっせ」内でレストラン「ふるさと薬膳いちい」の営業を開始した。現在はレストラン「<sup>いちい</sup>櫟」と名称が変わったが、営業当初から食材にこだわり、地産地消を基本にミネラル野菜を中心としたメニューを提供している。



写真6 ベジメルバーガー

また、会津大学の学生と連携し、地元産米粉とミネラル野菜、特産品「<sup>くるまぶ</sup>車麩」のカツを利用した「ベジメルバーガー」を商品化しており、ヘルシーでおいしいことから人気の商品となっている。レストランで食事をしたお客さんが「よりっせ」で販売しているミネラル野菜を購入して帰るといった相乗効果も見られている。

さらに、町内の温泉施設や菓子店、飲食店ではミネラル野菜を使った料理や菓子が作られ、県内のレストランでもミネラル野菜が使われるなど、ミネラル野菜の評価と利用の輪は確実に広がっている。

#### (6) さつまいもで都市住民との交流スタート

農協青年部西会津支部は、平成21年度の県産品開発プロジェクト「西会津町産品づくり」の一環として、芋焼酎作りに取り組んだ。焼酎作りに当たって、ミネラル栽培でさつまいも「<sup>こがねせんがん</sup>黄金千貫」を栽培したところ、おいしいさつまいもが生産された。これを契機として、西会津町ではプロジェクト後も芋焼酎が作られ、平成24年度からは、普及会が原料となるさつまいもの栽培を担当している。平成25年度には、収穫体験等による都市住民との交流も行っており、今後の更なる交流の拡大を検討している。

#### (7) グリーン・ツーリズムの取組支援

平成21年に「西会津元気グリーンツーリズム協議会」（以下「協議会」という。）が設立され、個人会員17名、団体会員12団体が登録し、観光・体験型の交流により地域資源を活用した地域の活性化を目指している。普及会も団体会員として登録しており、「農業体験メニュー」では農業体験の場を提供し、収穫体験の指導を担っている。また、協議会は、普及会員が行っているグリーン・ツーリズム体験の受入れに対し、情報発信を行うなど双方向での支援、協力体制が取られている。